



經典餘師

論語一

二

口 11
2047
2



2047
2

讀法

論語朱熹集註

學子而第一

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

論語朱熹集註

溪世尊 譯

學子而第一

校文「學而」の二字ありて以て篇の各とすと以下もその例なり

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」
子曰「學而時習之，不亦樂乎？」

有勞自遠方來，不亦樂乎？

有勞自遠方來，不亦樂乎？

論語一

二

玉泉集官藏

人知不而して恤
どやう不亦君子
やう不人乎

有子曰く其人と
為孝弟にして上
と犯さず好む者ハ
鮮一上と犯さず好
ま不して亂と作
んと好む者未と
之有未(而)助字
(未)ニ反よむる

君子ハ本と務む
本立て而して道
生孝弟者其仁
を為の本與

子の曰く巧言
令色ハ鮮一仁

曾子の曰く吾身
日小三とび吾身
を省むる人の為
に謀て忠と不
乎朋友と交して
信たらず不乎傳

言言一
徳て善も悪にも類を以て聚るは朋友たるは徳
とあひて相あつたるとハ誠は位高たのりたるは
徳たより勝るものとあまハ
近ととらハ勿論たるべし
人不知而不愠亦

君子乎
胸中徳をたく
徳を知らず或ハ人の善をまめ誨まとも却て信じて用
らざるをともあまハ然とりの心よりやと愠どる心
此ハ徳の高く学問の深し入る兆たるなりと

有子曰其爲人也孝弟而好犯上者
鮮矣不好犯上而好作亂者未之有也

御弟子有子の曰くハ此れそ父母の孝をほく兄の弟を
爲人たるは必して上る人より高ぶるなり或ハ悪さげらる
まを好むの鮮矣ま上る人より犯めらるる人たるは亂ら
るる挙動を作しハもむりより未之有未と

君子務本本立而道生孝弟也者其爲

仁之本與
仁ハ本心の徳なり徳を成小ハ本を
の全体おのり生さむるは故より君子ハ本を

年長の人ハ恭敬一さたり人を愛まらるりのハ人ハ愛ま
らるる一孝弟の道ハ本心の徳を爲の本なり

子曰巧言令色鮮矣仁
言を巧しして
顔色を令し類の人ハ仁義の心けつて鮮りのなりと
の仰たり鮮矣ハ聖人實裕の御詞して實はるは

曾子曰吾日三省吾身爲
意とまるべし

入謀而不忠乎與朋友交而不信乎傳

不習乎
曾子ハ聖人の御跡を継ぐ弟一の御門人
なり仰らるるハ吾身はあらはの三の品とて

習不乎

子曰まはく千乘之國を道に事を敬して信なり用と節にて人を愛も民を使し時を以て

子曰まはく弟子を入て則ち孝を出て則ち弟を謹んで信なり

汎く衆を愛して仁を親く行餘力を有らば則ち以て文を學ぶ

子夏曰く賢を賢として色に易く父母の事を能く其の力を竭く君の事を能く其の身を致す朋友と交はり言ひて而して信有らば未だ學未と曰ふと雖も吾も必ず之を謂ふ矣助字と

吾身に慎みたるやと省見なりその一は人の為世話せんを謀る名聞はかくつて忠とありあそこのあはれ二は朋友は交はる信とて言のたぐはざるを重とん三は師より傳ふけする道は習く一考てその意を發明するやどに

○子曰道千乘之國敬

事而信節用而愛人使民以時國を治るの法を説く異邦の法凡そ百里四方の國ハ軍役車千乘を出して之れ國をおさめ道むくの法との三ヶ条を要とん故事とハ妄よ法度を定むるは信とハ法令一は出ハ違とまことそり節用とハ國の入用公務の弊その節よ叶ざるはハ民の財宝をとりてハ叶はざるは下々ならぬ困窮に至る以時とハ民を使はざるは家業のさびるはを要とん春ハ耕ハ夏ハ草刈り秋ハ實のりと收まらん冬の時ハ民の閑暇なるこの時ハ池ふらん等の公役ある

○子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎

愛衆而親仁行有餘力則以學文

子弟は孝者家に入りてハ父母は孝まふ一外は出てハ年長の人の弟くあふべいと謹んでまふ信はたざる

子夏曰賢賢易色

事父母能竭其力事君能致其身與朋

友交言而有信雖曰未學吾必謂之學

矣御人子夏の曰くハ色を人徳を好むと林は色を好む心を用ふる如くさるべし信實として志

の絶えにたれハ色ハ理の外とり俗説のていふ貪く世は追々人も思の外なることを人志を進行とせり

未二五よむこ

子曰イハク君子クニノコ重カチく不ズ則ナラば威カチなり不ズ學マカ則ナラば固クく不ズ

忠信と主とせ

己ミに如ナら不ズ者ノ友トシテ無ク

たぐいよめづべし一 事よ臨みて生を惜む朋友の道ハ言を
たぐいよ信あるを要とらんたとく學問た人なりてもかくの
學一人と吾ららべしと

○子曰君子不重則不威學則不固

君子といえ位ありて上よ立人をりたより又徳ある人をも
りく人く動じたのとむらゆの各なり以下もよの
例なりそれ君子ハ身を重かりつべきたより高なるよの
あくよ重とハたとへハ百斤の磐石の如く一二斗の軽
りのハ人これを輕いなりてあそぶ人も又磐石の如く立
居るよの輕いなりば語きくまよりく謹むる時ハ人
よ威ありてまらなりされを重威の主忠信ハ
道より重くば威ありの學より固さ 忠信ハ
主とならるる信ハ事をとらぐべきなりを以て心の
のなり一家よ主なるまら人あるなる
このゆよ忠信を心の主とまら 無友不如己

者

君子ハ重威を守て忠信を主とくよく 過
を改とめく 憚と勿き徳ありの不如のハ
常ハ友とたなるても益なりとま 過則勿憚改 忘をバ
必も阻とめらるるよのあり 失とら

過アヒてバ則ナラば改メ
むカに憚カと勿カ

曾子の曰く終ハに
慎シく遠クを追ヒ民
の徳厚ク歸ル也

子禽クニノコ子貢コウ問フて曰ク夫子ニ是レ邦ノ
小キ至ル必ズ其ノ政

○曾子曰慎終追遠民德歸厚矣

終とハ今の世の忌服のよなる遠とハ七回忌十三回忌乃
至十七年二十五年まらをり小慎とハ卷中は哀の禮を及む
べきをり追とハ父母在世の時を追思より誠の心を及む
ざるをり上よ立人なりよあは下歸ふより徳日
に厚く 子禽問於子貢曰夫子至於

おと聞之を求
むる乎抑之を
與乎於助字

子貢曰く夫子
温良恭儉讓
以て之を得
夫子之之を求
むる其諸人之
之を求む小異
なる與

子曰く父在バ
其志ざしと觀
父没して其行ひ
を觀る三年父
之道を改むる
と無と考と謂
可於助字
有子曰く礼之用
ハ和を貴と先
王之道斯と美と
為小大之小由

是邦也必聞其政求之與抑與之與

子禽も御弟子なり子貢への問に聖人常は是の邦
かこの邦に至るは其の國の君必して政道のしを聖人へ
うづめ聞めぬたると聖人の徳大なりとも實はふし
よぞ覺ゆるの夫子とハ聖人を尚の詞なり今世俗のひ
習ハセる貴人といひ尊公

子貢曰く夫子温良恭

儉讓以得之夫子之求之也其諸異乎

人之求之與子貢の對し夫子ハ元より大聖
の歩と過らふところ人自ら徳を化存神の妙と
ハ神明の御徳なりびるなりなり聖人
の故に聖人右の事と與るとと得るハ他人の求むる
とハ其諸異なりとハ吾聖人の傍に侍て常は其の五ヶ
条はくはるはるはる温とハ和とて寛裕なるはる
良とハ言語直まきまきとハ恭ハ敬といひの外ハあるはる人

子曰父在觀其志父没觀其行三年

無改於父之道可謂孝矣

孝とて子より者父母世に在るとは志ざしと擲て操を
まじりたり然ども時ふよりてそのまじりハ動かさるる
すハ父母世を没せハ身の行事多くハ身ハ多きと
於なり其の故に志ざしと行を觀てその色を考ふ小大の
父母没して三四年がちとて經とてハ父母のしを
道を改むるに忍めぬとてハ孝心なりと謂へ

有子曰禮之用和為貴先王之道斯

為美小大由之

礼とハ高下尊卑位を定むる
事なり其の交接の同聖人
は法を立ちしをり然し礼法のをさび
く執りしをり和をさるる時ハ却て法のやぶるはるはる

行ハ不所有和
知レ和モ礼ニ以テ
之ヲ節セ不モ亦
行ル可カク不

有子曰信義
近レ言復可也恭
礼ニ近レ耻辱に
遠ク因レ其親
と失ハズ亦宗と
可

子曰君子食
飽を求ルと且居
安と求ルと且事
と敏レて言小慎
有道に就テ正モ
学を好レ謂可也

子貢曰く貧
て諂ふと富
で驕ると金バ如何
子曰ハ可也未

父母ハ礼を動ズとあり、淑めを以て、恩愛乃
政道を以て、遠嶋を彫、先代の明王礼を彫
由の、**有所不行。知和而和、不以禮節之**
亦不可行也。子細ハ人の和を好レ、推ク

有子曰信。近於義、言可復也。
恭。近於禮、遠耻辱也。因不失其親、亦可
宗也。信ハ言の約、遠ハ遠、信を守レ、若シハ

子曰君子食無求飽、居無求安、敏於
事而慎於言、就有道而正焉、可謂好學
也。君子ハ道を樂ミ、学を好ミ、その外を願フ、

子曰。貧而無諂、富而無
驕。何如？子曰。可也。未若貧而樂、富而好

貧くして樂む
富て礼を好む
者若く不

子貢曰く詩云
切如磋如琢
如磨其斯之謂
乎

子曰まほ賜始
て與よ詩と言可
已矣諸よ往と告
て來を和者るり

子曰まほ人之已
を和不知と患へ不
人を和不知と患

為政第二

禮者也

子貢曰く禮は神の徳也。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

清く、謙く、神に敬ふ。或は出家遁世して、時を待たずして、必して

為政第二

論語

七

三才集官版

子曰まほく政を以て徳を以てまほく

子曰為政以德譬之北辰居其所而衆

星共之此段天下の政道を論じて政道の多くハ

利用を専らして理法權の三つを用ゆる事なれば利用
との勝手は専らして理法權の三つを用ゆる事なれば
も細鎖たる品は是れも法はかゝる事なれば是非なる事
權威の重と以て之を抑えたり天下を治るの肝要
治世永くついで時極て金銀の利用を上げ用ひ權を先
立て理と法は次は依て大方は論と賄賂との二つ行は
事なり古の聖王ハ民の為は利用を施し仁義の徳を以て
政として行ひしめよのゆへ天下の万民なるは順て道
守りて天の中央北極の辰にあり五星を以て益夜万代動
して其所は居ありたり天子と稱して天の分野
天子の事に當り衆の星ハ諸の臣下万民は當比

子曰まほく詩三百一言以て之を蔽

子曰詩三百一言以蔽之曰思無邪

四書の中は毎く詩の辭を以て詩の經と稱し周の聖代
の詩高き賤きとらまへて其詞葉三百篇を載する
古代ハ人々民間まじりて歌謡してあそびしる今ハ
天朝の文葉集の如く辭古雅うて教の意あり今ハ
儒者といへば通曉する其地ハ老少男女
貴賤都鄙相づひ人情を通じ知らる聖人も詩
經を知りて之を講じあてて如く行つての如く
と仰ありしなりさて聖人の仰ふ詩經の意多し
其徳一ツの言を以て述蔽さるべしと云う他の
義も多し詩の徳を以て心は意得た多し人々
惡の思ふは毎く
あめべしと云う

論語

三原集官藏

子曰、まはく之を道
ひくは政ごとく以て
之を齊くするに
刑を以てても民免
らして恥と毎

之を道びくは徳
を以て之を齊く
するに礼を以てても
恥と有て且格

○子曰、道之以政、齊之以刑、民免而無

恥、國を治むるに道びくは政ごとく、事後世に示す戒例なり。政ごとくは法度、禁制の簡条を出して示す戒

り、違背の者ありて之を犯すその輕重に依るがごとく、或ハ鞭うらハ又ハ流罪ハ殺等の刑を以て懲らしむ

るは依て民恐きて齊くするのなり、聖人仰ふかゝの如きものハ仁者の徳政とハらぶべきを何となれば

民を刑を恐て邪惡をあらはざるをさうして心中ハ
邪惡を耻めしむる有りたるなり

道之以徳、齊之以禮、有恥且格

聖明の君ハ徳禮を以て民を道びくは徳とハ身よ孝弟を行ひかゝる賢者を貴て奉りらむ礼を以て臣を使ひ仁愛を用て民を臨む、税歛貨殖を薄く省さざる貧民を救ふ、然るに死ハ万民上を戴らざる者ハあらずト

加之なりとも義理作法の礼ありとも民は抑へ知らむ然
とてハ下さる心ハ邪惡の道あるぬとも心は耻してよく齊

格と化さるるもの
免く世の安らぬその本とつハ民を義理の心を
起さる義理をさうしなるの本ハ家の産業
起さるる人君ありく之をせむの

○子曰、吾十有五而志于學、三十而

立、志を聖人臨らる御辨行の事を迷ひあたり聖人といへどもと立らるる學びの事とて聖人仰らるるハ字に志

四十而不
吾十五の年なり道理を以て見識

惑、五十而知天命、六十而耳順、

七十而從心
行を道ハ實りやうやうに在るもの心の内ハ一角立ち
る不惑とハ本よりさうやうに有べき事として理とらるもの
別よりさうやうな事ある天命とハ天地の間ハ物何によむ
その理とらる備り自然と定まり由來ある事を

子曰、まはく吾十有
五にして學に志
すと三十にして立
四十にして惑不五
十にして天命を知
六十にして耳順
七十にして心の欲

是る所^{ところ}に徒^{ただ}て
矩^{かね}を踰^こ不^ず

孟懿子^{もういし}孝^{こう}と問^と子^し
曰^いま^まく違^{ちが}と毎^{まい}

樊遲^{はんてい}御^ご子^し之^{これ}に
告^つて曰^いま^まく孟孫^{もうそん}
孝^{こう}と我^{われ}に問^と我^{われ}對^{たい}
て曰^いく違^{ちが}と毎^{まい}

所欲不踰矩

七十の御年^{ごねん}小^こハ心^{こころ}より何^{なに}事^{こと}も
七十の御年^{ごねん}小^こハ心^{こころ}より何^{なに}事^{こと}も
七十の御年^{ごねん}小^こハ心^{こころ}より何^{なに}事^{こと}も
七十の御年^{ごねん}小^こハ心^{こころ}より何^{なに}事^{こと}も

孟懿子問孝子曰無違

孟懿子^{もういし}ハ魯^ろの大夫^{たいふ}
孝^{こう}の道^{みち}を
問^とて曰^いく違^{ちが}と毎^{まい}

樊遲御子告之曰孟孫問孝於我我對

樊遲^{はんてい}御^ご子^しに告^つて曰^いく
孟孫^{もうそん}問^とて曰^いく
我^{われ}に問^とて我^{われ}對^{たい}て

曰無違^{いふむちが}
御^ご車^{くるま}の傍^{かたわら}にあり
故^{ゆゑ}右^{みぎ}の事^{こと}を告^つぐ

樊遲曰何謂也子曰生事之以禮死葬

之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}祭^{まつ}之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}
樊遲^{はんてい}對^{たい}て何^{なに}謂^いふ
子曰^い生^{せい}事^じ之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}死^し葬^{さう}

生^{せい}事^じ之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}
死^し葬^{さう}之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}

祭^{まつ}之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}
禮^{れい}を以^{もつ}て

禮^{れい}を以^{もつ}て
祭^{まつ}之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}

祭^{まつ}之^{これ}以^{もつ}禮^{れい}
禮^{れい}を以^{もつ}て

孟武伯問孝子曰父母唯其疾之憂

孟武伯^{もうぶく}問^とて曰^いく
父母^{ふぼ}唯^{ただ}其^{その}疾^{やまひ}之^{これ}を憂^{うれ}ふ

父母^{ふぼ}唯^{ただ}其^{その}疾^{やまひ}之^{これ}を憂^{うれ}ふ
疾^{やまひ}を憂^{うれ}ふ

子游問孝子曰今之孝ハ
是を能養ふを
謂大馬に至まで
皆能養ふと
有敬セバ何を
以て別人乎

子夏孝と問子曰
色難事
有弟子其勞
小服酒食有先
生饌も曾て是
を以て孝と為乎

非なり一ツの誤りて小疾といふのハ四の攝めりのたのまは是
式よりくる身持のなき
程なりて孝をんとぞ
○子游問孝子曰今之

孝者是謂能養至於大馬皆能有養

敬何以別乎子游と文章を以て名を得御

鳥獸を養ふとの別ありあへん乎と ○子夏問孝

子曰色難有事弟子服其勞有酒食

先生饌曾是以為孝乎絶難ハ父母

色は易らど愉びしくするハ色を第一とは他人

對とも孝を心よかぐる者ハかくの如く有る色ハ

子夏難事あり先生得て

心を助服一酒食事の饌ハ先一番は先生の

○子曰吾與回言終日不違如愚退而

省其私亦足以發回也不愚

回ハ御弟子顔淵の御名なり聖人の御門中て大徳の

聖人と顔淵と天竺の釈迦如來なり聖人の顔回を

疑を尋回とハらがひて論をのまて違回といふ事

たる愚なる者の如く夫ゆ席を立退て後その私

つつてその光を増足果して回ハ愚なるに

子日まはく吾回與
言ひつと終日違
不と愚なるが如
退をひて其私
を省むる亦以
て発するに足
回愚なる不

子曰まはく其以て

所を觀其安

所を察する人馬

子曰まはく故

温て新

子曰まはく君子ハ

子曰まはく先其言

後之に従

子曰まはく君子ハ

周くして比

小人ハ比

子曰まはく学て

思ハ不ハ則

子曰まはく異端

攻るハ斯害

也

也

也

○子曰視其所以觀其所由察其

所安

人馬度哉人馬度哉

○子曰温故而知新可以為師矣

○子曰君子

不器

○子貢問君子子曰先行

其言而後從之

○子曰君子

周而不比小人比而不周

○子曰學而不思則罔思而

不學則殆

○子曰攻乎異端斯害也已

也

也

也

也

也

也

論語

十一

子貢問

子曰「由女知知之乎」
之と知を誨ん乎
之と知を之と知と
為知不を知不と
為是知也
子張祿を干ると
子曰「多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘

子曰「多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘
多聞闕疑慎言其餘

○子曰由誨女知之乎。知之爲
斯乎而已。○子曰由誨女知之乎。知之爲
知之不知爲不知。是知也。

子張學干祿。子曰多聞闕疑慎言其餘
則寡尤。多見闕殆慎行其餘則寡悔。言
寡尤行寡悔祿在其中矣。

哀公問曰何爲則民服。孔子對曰舉
直錯諸枉則民服。舉枉錯諸直則民不
服。

在矣助字

哀公問曰何爲則民服。孔子對曰舉直錯諸枉則民服。舉枉錯諸直則民不服。

季康子問使民敬忠以勸。如之何。

○子曰由誨女知之乎。知之爲
斯乎而已。○子曰由誨女知之乎。知之爲
知之不知爲不知。是知也。
子張學干祿。子曰多聞闕疑慎言其餘
則寡尤。多見闕殆慎行其餘則寡悔。言
寡尤行寡悔祿在其中矣。
哀公問曰何爲則民服。孔子對曰舉
直錯諸枉則民服。舉枉錯諸直則民不
服。
季康子問使民敬忠以勸。如之何。

命五十一

十三

子張

如何子の曰く之に臨之は莊を以てせんば則敬孝慈則敬孝慈則敬孝慈

何子曰臨之以莊則敬。孝慈則忠。舉善而教不能則勸。魯の大夫季康子の問なり。下への勸ふハ如何之何のつて宜やと問奉まつる御答上は立人下へに臨まるとハ莊を身持弟一なり。莊とおもく 立人下へに臨まるとハ莊を身持弟一なり。莊とおもく

或謂孔子に謂て曰く子奚ぞ政とを為不

○或謂孔子曰子奚不為政聖人暫く國の政道を與ふ

子曰書云孝乎惟孝友于兄弟施於有

子曰奚ぞ政とを為不

政是亦為政奚其為為政御答書經の語小も親むハ一家の政なり國を治るも其義を地

子曰奚ぞ信無其可也知不

子曰人而無信不知其可也夫車無輓小車無軌其何以行之哉

命 五〇一

正集集告藏

之を行ん哉

子張十世可知也

子曰殷夏之禮因損益之所可知周八殷之禮因損益之所可知其周之禮者或百世可知也

とも可知也

子曰其鬼非也

今日人と生きてはあの信を弟つと信をよしてハ立ぶるは
この故に仁義礼智の四つより信を下し置たる仁義礼知
ハ東西南北春夏秋冬の如くなり信ハ中央と土用とに比し
て此を除て立ぶる信ハ道を違ふる君父ハ忠
と孝との道を違ふる他ハ推て知るべし人と而その信
毎バ其可べその理を不知信をさ人いたと牛車の庸小
掛る軌た馬車の軌木なこと同トと何を以てり道を行むる理あり哉とた

○子張問十世可知也

子張の問はる大て人十世を先の承と

子曰殷因於夏禮所損益可知也

也周因於殷禮所損益可知也其或繼

周者雖百世可知也

此段怪を問は正御者是誠は聖人の妙言なり且

殷の前を夏の代とりの夏の代四百餘年の後殷となり然る小天下を治る大事の不法ハか捨べきの理なり一年の月日と十四ヶ月十五ヶ月ともわたりた罪の重を生ても置きたるなり是をバ殷ハ夏の礼を捨てて因用とハつたなり殷の代六百余年の後今の周の御宇となり是よりて殷の礼は因なり然るも時の宜くまてて事の品よりて益と損との義ありハ可知なりた夏夏の代ハ今天朝は用るごとく寅の月を正月は用るをかく殷ハ丑の正月は用る今月の十二月を用るなり周ハ子の正月は用る今月の十月を用るなり是子ハ天の時丑ハ地の時寅ハ人の時なるが故なり其心ハその世界を以て天道を戴とりの理を用ひちてハ地は養つるものなりとの義あり人の世なれば人を尊とりの義より起たり又夏ハ人と交るふもその忠を尚ぶ殷ハより進物の質より周ハ飾の文を用る類少の損益ハ代つて異なる事なり是を以て推時ハ此後周の世は繼て興る御代の幾度或て乃至百世後の事知べし道理也

○子曰非其鬼而祭之諂也

義を見て為不
勇無也

八佾第三

孔子季氏之謂
八佾舞於庭是
不可忍也

三家者雍以
徹子曰
相維辟公天子
穆穆奚取於
三家之堂取人

鬼と人の死を以て今や... 天朝の鬼神論... 見義不為無勇也... 此段志... 重べ所ナク何事... 忠臣小害... 是憶病の第一勇気... 是のよりのこと

八佾第三

孔子謂季氏八佾舞於庭是
不可忍也

不可忍也 聖人魯の卿大夫季孫氏の所為を評し

增長して天子の音楽八佾の舞を我庭上は遊見

事その罪をなすことともしも尚も愚心なり是をも堪忍して

犯す所の季氏たるは孰れやの事をとも忍んずは不可

父母を殺害するとも不可忍なる者なりとの仰えられ

下として上を軽ト臣として君を慢トハ聖人の惡

の刑罰を以て論セバ耳よさらば小の者も汚しと重々

樂人の佾を行たり 諸侯ハ六ツ大夫ハ四ツ士ハ二ツなり

○三家者以雍徹子曰相維辟公天子

穆穆奚取於三家之堂

此の如く季氏の子孫の如くを季氏孟氏叔氏の三家の如く
 惡逆無道なり。聖人ふりて罪の如く天子祖宗を
 祭るの如く祭礼畢て徹の時その雍の詩を誦樂す。夫
 一して之を行はざるの故は雍の詩の詞も徹相の如く
 ハ維多辟公の如く其体として尊し天子の御
 事ハ只何しなむ穆穆して恐あて尊し天子の御
 三家の者矣の理ありて礼を犯し已が堂は之を
 行はばや大人とも罪をくらむ事なり。天朝
 於て一向詞ふものごと
 事有ざるなり

子曰。人而不仁。如禮何。人而不仁。如

樂何。仁なき人なり。梅桃の實を桃仁梅仁とつのも
 義理作法の礼も相和親睦の樂も
 如之何と云ふ事の有まざる事

林放問禮之本。子曰。大哉問。

子曰。人而不仁。如禮何。人而不仁。如樂何。
 仁なき人なり。梅桃の實を桃仁梅仁とつのも
 義理作法の礼も相和親睦の樂も
 如之何と云ふ事の有まざる事

林放禮の本と問
 子曰。大哉問哉

御門人林放心は、今の礼法と云ふは、飾りくろふを專と
 起居進退衣服等も表を法くろふ事なり。ぬ
 礼人の作法と云ふは、有るべき礼の起
 本を同奉まらぬ依て聖人之を器言ひてその方の同一を
 志し、あつて禮與其奢也。寧儉。喪與其
 大なる哉と

易也。寧戚。礼を誦のふは、その本意の如く
 表向義麗は飾を務むこと也

子曰。夷狄之有君。不如諸夏之亡也。

世衰へ君臣礼義を損ひて天下道なきを嘆かふ因て
 仰らざる小ハ今礼樂もたれ夷狄の國もくも君と云ふ者

子曰。夷狄之有君。不如諸夏之亡也。

あは上下の分限作法ありと見えし我諸夏ハ礼樂
文章の根源不在なり臣として君を奮人として
倍臣として天子の礼を犯りたり誠は人面にして
行なり君臣の名のついでして礼義を正しめられ
如不たりと○天朝ハ万邦の宗事今や非
誠は君臣の道天地日月の如く万代不易自然と相犯
なく其光明なり固より中華夷狄の及ぶ所あらず諸夏
とハ夏ハ大の意なり中華ハ諸くの大國あり土地の
義なり

季氏泰山に旅
子冉有謂て曰
弗乎對て曰能
不子曰まわく嗚呼
曾て泰山林放
如不謂乎

○季氏旅於泰山子謂冉有曰女弗能
救與對曰不能子曰嗚呼曾謂泰山不
如林放乎
季氏がとを悔慢て毎道なるを罪し
者ハ君を強て諫し若彫られ官祿を
説示し御弟子冉有の時季氏子事て臣と
わたり聖人叱らせりややハ季氏今礼を犯せり
主は忠の心を不義なるをいふ救はれり冉有魯奉
季氏の心を諫るも用る能く取王人より仰せらる
神ハ非礼を受むと今泰山の神靈季氏が礼を受べり
吾門人林放ま礼を正すとこは是なり泰山の神り
礼を受るは林放は不如なり女も曾て
たぐらるや嗚呼といまやびの心すはるけこの心
餘意

○子曰君子無所爭必也射乎揖
讓而升下而飲其爭也君子

争怒りありの心狭く量の鄙さより起り
忽ち目よ見ると争簡せざる故なり月日を踏
はしてもの事どもたう仰せあるや但し君子は
事のあるハ射礼の時堂上は升堂下は降下に就て之有
それハ勝者と負と者互に己よちるるの揖讓つひあり
て酒を飲まらるるや争也と君子ハ致とたりと仰

子曰まわく君子
ハ争す所必也
射乎揖讓して
而して升下て而七
飲其争もハ
君子なり

祖來先生の語りも、それ人の争とつゝのハ自取乃
樹トよりを信向せざる人は是非不信向なすゝめんとき
より起るなり

と云ふ

○子夏問曰。巧笑倩兮。美目盼兮。素以

為絢兮。何謂也。子夏詩の辭、よくよくあり、依て

義人の笑ハ口輔の巧、倩兮なる目ハ、盼兮に表し、然る

素ののちと以て其上は、絢と云ふとあり、何の謂よやと云

子曰。繪事後素。御容これ繪畫の事、て本義人

以て仕立夫より、彩色を施と云ふ、さきこそ素より後、

音信の礼あり、と云ふ。曰。禮後乎。其理を以て推する

に、今日人の礼とり、者ハ、尊卑とも、人に交ると上、

其下地あり、先忠信を以て本として、而して礼を

以て給ふと云ふ、為と云ふの乎と詩の詞より、礼の夫

起と云ふ、子曰。起予者、商也。始可與言詩

已矣。聖人之を稱、の誠、起の者ハ、子夏なり

○子曰。夏禮、吾能言之。杞不足徵也。殷

禮、吾能言之。宋不足徵也。文獻不足故

也。足則吾能徵之矣。此段、聖人夏と殷との礼を述

能言、之、説き、と云ふ、と、教誨、を、證、徴、不、足、な、り、杞、の、國、ハ

夏の宋の國ハ殷の末、た、り、文獻、有、ハ、吾、能、之、を、證、徴、

故、之、證、徴、と、も、不、足、也、り、文獻、有、ハ、吾、能、之、を、證、徴、

と、云、明、ら、し、

子夏問曰。曰。巧笑倩兮。美目盼兮。素以

為。何の謂也。

子曰。繪事後素。

曰。禮後乎。

子曰。夏禮。吾能言之。杞不足徵也。殷

禮。吾能言之。宋不足徵也。文獻不足故

也。足則吾能徵之矣。

子曰。夏禮。吾能言之。杞不足徵也。殷

禮。吾能言之。宋不足徵也。文獻不足故

也。足則吾能徵之矣。

子曰まはく禘既に
灌して自往者吾
之を觀と欲と不

或ひと禘之説を
問子曰まはく知不
其説と知者之天
下於其諸を
斯も示り如乎其
掌ごらと指ごら

祭如在祭神如神
如在

子曰まはく吾祭に
與らば不祭不

○子曰禘自既灌而往者吾不欲觀之

禘ハ周王祖宗の祭の名也魯ハ許々々々祭未白酒を
灌を清ちちとあり過禘灌の往者魯の國礼義衰へ
例も不欲觀とて禘ハ先祖と太祖とを配セ祭なりとの
東照廟太祖報田公を配セ祭と如

○或問禘之説子曰不知也知其説者之於天下也其如示諸斯乎指其掌

此段ハ魯人ガ禘之祭の説を問奉る然も不知との御答ハ
右小も説とて訊く其理をのめりて飛より天子なりて
祭らるるの訊ゆる魯の國一對一諱とて其理をのめりて
敬の至たりとそれ故に明さされハ仰なくと其理をのめりて
元禘の祭ハ天子御先祖を上天へ配祭あり其禮式ハ仁心
考心あり誠と敬の深を用ゆる是此上なり因て仰るも
其禘の説を知らざる人ハ天下を治む道に於ても心安く
世を治むるもさしとなく此時座上りての御答なり

祭如在祭神如神在祭如在祭神如神在の儀上も下も人間
心女ををたてて御くするふて斯を
如示ありとて指を以て其掌を教の

○子曰吾不與祭如不祭祭ハ不祭と如く人として仰らる
祭ハ不祭と如く人として仰らる
祭ハ不祭と如く人として仰らる

王孫賈問曰與其媚於
寧寧媚於寵
何の謂也

子曰まはく然不罪
を天は獲ハ禱
所を

子曰まはく周ハ二
代を監して郁郁
乎して文なる哉
吾ハ周は從
子大廟入て事
毎二問或は曰
孰ハ野人之子礼
知と謂乎大廟に
入て事毎二問子
之を聞て曰まは
是礼也

○王孫賈問曰與其媚於
寧寧媚於寵
何謂也

王孫賈は名なり衛の國權門の大夫
あり人たかり一が聖人を不知やかか
る寵神ハ何方ても内庭より常は人の通
敬ひ拜するも身にたとへ時節を得て
常は尊をのりて是とて俄は權威を
君子ふたと衛の君は比と當時聖人
君ふるのうらむして我は諂を利徳
益たり寧ハ寵の如く時を得たる
諂を賢人の諂
あつ何の謂也子曰不然獲罪於天無所禱
也

今日天の道ハ非礼を惡のあまり
罪を天ハ獲る時ハ
たとへ寵の神へ諂祈とも益たり禱は所毎といふ者也

○子曰周監於二代郁郁乎文哉吾從
周

是ハ周の盛たる事を稱する夏の代殷の代二代とも聖人
の王者出で世の道大てい備はるる禮樂いささか調はるる
小至して右二代の事を監合して始て成就を乞げ誠は郁郁
文ある哉り右三代の礼は於てハ吾ハ周を尊ぶなりと仰らる

○子入大廟每事問或曰孰謂野人之
子知禮乎入大廟每事問子聞之曰是

禮也
この段ハ魯の御先祖周公を祭る大廟の儀也
聖人この事ふあめりらるる此時聖人何一ツとして毎
事を問ふ野人は聞合ふ依て或は聖人を誹り此人を
礼をよく窮むと謂つる乎さの度大廟に入て何ゆへ
毎事人といふ耳合せりや聖人之を聞めりて仰らるる
礼の本ハ敬恭の一より出さるる事とてその敬ひは

己を引下人より後を第一と云いつやうか法を極し事國法
 やこと故典といふ事もあるが不知を知りていふは毎礼なり
 即ち大廟に於て毎事も同じく合するは真は是礼といふ者
 或人礼の教意を知らぬ故なりと仰る聖人鄙は御生けり故
 鄙ににやめて鄙の
 邑人の子とせしむる

子曰射不主皮為力不同科古之道也

射の本意ハ己を正と第一といひ己が身正しうれば中と
 なり誠は君子の徳よりなるやうなる大藝なり然り當時ハ
 革を以て厚く張的を射通を主として古之道ハ皮を貫くとハ
 主として皮といふことなり力量の科不同ゆへなりと云

子貢欲去告朔之餼羊

古ハ天子より諸侯へ
 曆を頒與ふ之を
 拜領して先祖の廟堂へ藏て月の朔日すうじつに羊を以て酒宴
 の祝をなして祖廟へ告奉て後下々へ觸分らるやうな事を
 朔を告る餼を羊といふなり
 去るに此礼久く廢て今ハ只
 酒宴を用て寄合をとりたり依て子貢の心は也なりハ礼も

子曰賜也爾

かひくもに辭なる事をいふハ毎益なり
 子曰賜也爾
 それよりハ之を去やめんと欲なりと

愛其羊我愛其禮

聖人の御意にありて
 餼羊あまは其跡負つて本小なり時節もあらん
 何とぞして吾ハ其礼の廢さるやう小と愛なり再ハ羊と
 愛といふのやうなり
 天朝も舊礼の残てあまは中華大竺
 の事といふもさるる品さるる何とぞ本のどく正しきもの

子曰事君盡禮人以爲諂也

臣として君をおろそかにし事道は背の大なり
 依て聖人君を厚く尊敬するの道を示し然ども
 今の世として礼を盡さるる諂や小以為となら

定公問君使臣臣事君如之何孔子

對曰君使臣以禮臣事君以忠

如何孔子對曰曰
 曰曰君臣と使
 礼を以て臣君と
 事に忠を以て

子曰射不主皮為力不同科古之道也
 子貢告朔之餼羊去んと欲也

子曰賜也爾
 其羊を愛ま我ハ
 其礼を愛ま

子曰事君盡禮人以爲諂也
 定公問君臣と使
 臣君小事之を
 如何孔子對曰曰

對曰君使臣以禮臣事君以忠

此段定公取聖人へ同奉るなり。君の臣を使之るは臣の君に事奉まらざるの道ハ如何となり。御答君と臣とハ義の重きを以て合体なせしめたるなり。君の任ハ周を用ゆ正しく上り坐し。下りて臣下をけしむ人を用なせし倚偏なからざるべし。重威を守て忠と不忠とを心よりけむ是を礼とす。臣下の任ハ敬と重とを事大小に就てうやまひの心をもちて是を我生命ハ君不奉り者と定べし。君の礼あることなるとし。心よりくべくくむ是を忠とす。

○子曰關雎樂而不淫哀而不傷

關雎ハ詩經の始あり。歌なり。文王の徳よく天下を化し。能治るるをのべり。徳とハ偏倚なく中庸の節制にあり。哀めども身命を傷となく。

○哀公問社於宰我。宰我对曰。夏后氏以松。殷人以柏。周人以栗。曰。使民戰栗。

哀公社の義を御門人宰我より問ふ。社の義ハ古へ土地に功德ある人を其処に祭る。天朝の鎮守産土氏神等なり。社ハ必む樹木を樹かこむなり。其風儀夏の後代ハ松なり。殷の代の人ハ柏なり。當時周の代ハ栗なり。扱いしハ罪ある者。社に傍りて。今樹木小木の義をとりて人を戦ひ栗使ふなり。とぞ。この段宰我辨舌よ名を得し。罪なり。聖人よ此を責めふ。来社よりゆり木ハその土地に用ひて。宜きを樹とせし。右宰我の述し。義小あり。松と柏と。何の義を取て答ん。強いては。松柏の二木も操節の真固徳を取べし。とせん。誠は君子ハ言語を深く謹むべき。とあり。宰我の辨ハ口小出るに。まことし。ありのなり。

子曰成事不説。遂事不諫。既往不

咎。聖人右の事と聞めし。嚴しく責めらるる。後を成し。成事ハ説不遂事ハ諫不既往と咎。誠は成し事ハ説せし。益なく。遂る事ハ諫て益なく。既往と咎あるに。咎と仰なり。

子曰。關雎。樂而不淫。哀而不傷。

哀公。社を宰我より問。宰我對曰。夏后氏。松を以て。殷人。柏を以て。周人。栗を以て。使民戰栗。使曰。民と戰栗。使

子曰。成事不説。遂事不諫。既往不

咎。聖人右の事と聞めし。嚴しく責めらるる。後を成し。成事ハ説不遂事ハ諫不既往と咎。誠は成し事ハ説せし。益なく。遂る事ハ諫て益なく。既往と咎あるに。咎と仰なり。

子曰「管仲之器小哉。」

或曰「曰管仲之器小哉。」
子曰「管仲之器小哉。」
或曰「曰管仲之器小哉。」

熊沢先生の曰く、
「可も人の人の言を信とするの
いへる言の必も正し明めざる言の
今の僧侶の名を唱へて身小僧衣を著
りて天然の教もさうなれぬことをの
益なきと
○子曰「管仲之器小哉。」
古の管仲
齊の桓公の軍師となり桓公と覇者となり威を以て天下を
服し天子を守護なり奉養する然ども明德仁義を以て
してお知權謀の下知なり一は聖人なり一はひて
小なる哉と仰らる小は心さましく一はくちひたなり

邦君樹門。塞門。管氏亦樹門。邦君
之好。為友。坊有
管氏。又友坊有
管氏。又友坊有
管氏。又友坊有
知ハ孰礼ヲ知不

子魯の大師に樂
と語て曰まはく樂ハ
其知可也始作

子曰「邦君樹塞門。管氏亦樹塞門。邦君
為兩君之好。有反坊。管氏亦有反坊。管
氏而知禮。孰不知禮。」
或曰「管仲の好
如何御答管仲礼を知らるるは
の屋形ハ表門と内の見附の間ハ樹木を樹て塞となす
との事倍臣との格式よりす平安の本願寺等之を
用とすは兩邦の君の出會ハ反坊の間ありらむとの
中ハ例として楹と楹の間ハ盃をのせ置がとのありらむとの
今管氏倍臣として之を用ゆ管氏礼を知らるるといへ孰
人もとの礼を知らるるといへ程先生の曰く三歸の
者とかりし上ハ礼を犯す
あれ器量のの小哉所以なり

子語魯大師樂曰樂其可知也始作

翕如也從之純如也皦如也繹如也以

成 此時世衰樂缺 聖人これ正し 魚目の

或ハ清ク或ハ濁ア 高又下ク相和 交テ純如也然

終 各ハ已ダ音を吹分テ 皦如 然 五声別

○儀封人請見曰君子之至於

斯也吾未嘗不得見也從者見之出曰

二三子何患於喪乎天下之無道也久

矣天將以夫子為木鐸

某此時聖人衛を過 聖人ハ見奉 封を守 儀と 所ハ衛の領分

翕如也從之純如也皦如也繹如也以

儀の封人見んと請

て曰く君子の斯に

至五未嘗得見

從者之見

出て曰く二三子何

患喪乎天下之無道

也天將以夫子を以て

未將 二爻よ

嘗く 聖人ハ見奉 時節到来 今より道も起

聖人を見奉る 誠 木鐸 成 風鈴の大

○子謂韶盡美矣又盡善也謂武盡美

矣未盡善也 韶ハ聖人舜帝の樂 武ハ周の

批 天下をとり 武王の徳ハ 同 醜 天下の人た

征伐 名逃

論語 一 三 二 三十五 王 集 解 卷 第 一 章 第 一 節

子韶を謂く美 を盡と又善を 謂く美を盡と 未だ善を盡 未也

子韶を謂く美 を盡と又善を 謂く美を盡と 未だ善を盡 未也

子曰まほく上居

て寛くなく不礼と
為て敬なく不喪
臨て哀ま不吾
何を以て之と觀
哉

里仁第四

子曰まほく里仁
を美と為擇んで
仁は處不馬を得
知を得

聖人の詞明鏡の如し人あるは天朝の天子一姓を誇り
のあり勿論乃となく天朝元より真の天子の國に
及して中華夷蠻の

○子曰居上不寛為禮不敬臨喪不

哀吾何以觀之哉 人の君たり者ハ寛仁を以て
徳とを寛ハ何事をも急よ

量り付て行ハば色顔は出さば人その胸中を
量り付て不能なりり人の上は居て寛なりと人と接
るに敬まざりて高き喪中哀の節は心もまげ人情
を尽せしむる者ハ何以その觀所なる人なりと云

里仁第四

子曰里仁為美擇不處仁馬得知

此段住居は邑里ハ人情厚して互にあり所を
義と擇んで仁ある里は處べし本心を失はざりし
知

惠を得たり其所を
失ふ馬ヲ知を得人やと

○子曰不仁者不可以久處約不可以

長處樂仁者安仁知者利仁

仁ハ本心の徳を我物として義理の場は心を安つけ
て在ひとをりよ不仁者とハ心の置処をうりまひるなり
不仁なる人ハ久しく困窮の場は居て心約は時ハあり
操節をわけて不義なるものなり安樂の場は

處も礼を守りて著たらうて必むとらうなりとの
困て仁者ハ仁の場は心を安つけ道を守るとかく知ふ

利ハ身小利徳を付てその手は義の義に

○子曰惟仁者能好人能惡人

仁者ハ私の心あり人を愛し好むもまた人を
惡く捨るもまた義理よとづきとらう

子曰まほく不仁者
以て久く約は處
可く不以て長く
樂は處可く不
仁者ハ仁は安ん
知者ハ仁を利を

子曰まほく惟仁者
ハ能人を好し能
人を惡む

子曰苟志於仁矣無惡也

人苟は我心より本心をみぎまきして求むるに志ありばその外の外へ

子曰富與貴是人之所欲也不以其

道得之不處也貧與賤是人之所惡也

不以其道得之不去也

道不以其道得之不去也

然とも其場を堪へる富貴立身は迷をともハ其場に不處

君子去仁惡乎成名君子無終食之間

違仁造次必於是顛沛必於是

子曰苟志於仁矣無惡也

子曰富與貴是人之所欲

不以其道得之不處也

貧與賤是人之所惡也

不以其道得之不去也

君子去仁惡乎成名

君子無終食之間違仁

造次必於是顛沛必於是

於是一顛沛必於是

子曰我未見好仁者惡不仁者

好者不仁惡者

見未仁好者

以之尚之

不仁惡者其仁

為之加使不

矣乎

能一日其力於仁

用有乎我未

力之足不者見未

蓋之有人我未

君子といふハ仁心を胸に抱へて徳を成就せんや

困て君子ハ三飯を終食間も心は仁の場を違ふ

造次の間も急て顛沛をこの間も心は仁の場を

於て留る

○子曰我未見好仁者惡不仁者

者好仁者無以尚之惡不仁者其為仁

矣不使不仁者加乎其身

有能一日用其力於仁矣乎我未見力

不足者蓋有之矣我未之見也

子曰：「各其黨，於朝而道，聞之夕死，未可矣。」

士道に志ざり而して悪衣悪食と耻し者ハ未與に議ニ比ガハ

君子之天下に於て適宜莫宜義之與に比ガハ

君子ハ徳を懐小人ハ土を懐君子ハ刑を懐小人ハ惠を懐

人々仁の道とハ何ぞ骨折レ六ヶ布ヤリに力を用ゆることナク中々中々者ナラズ一日小ても仁心を用ふる者カノ不足してつゝぬといふ者を見たり又カ乃たカノ者有リと蓋ひたの色も我未之を見たりと

○子曰：人之過也，各於其黨，觀過斯知

仁矣。凡て人の過失といふ所のハ善も悪もその心の依黨

仁矣。凡て人の過失といふ所のハ善も悪もその心の依黨を以てして小人ハ薄きを不實と見たり君子ハ心厚きを誠と見たり

○子曰：朝聞道，夕死可矣。

人たる者ハ義理を弁ズ人バ有ベウババ朝小ても人々の道を聞て心を得バその夕も命也夕死も可也

食者未足與議也。凡て人たる者義理の道よ

志ざして鄙心より引くる事ナラズたとハ人とならざれば坐して己が衣の悪さをとらるる愧ぢ小人ハ膳部食物の不及を耻し者ハ人の權威を以てて妬たぐい未鄙文を以ててとらるる者ハ義理の議を以てて不足

○子曰：君子之於天下也，無適也

無莫也。義之與比。凡て徳ある人ハ世間の理に於て莫と宜也。只義理に適し不叶いと心省く事ナラズ凡て義理に與に比エらるる

○子曰：君子懷德，小人懷土；君子懷刑，小人懷惠。

君子ハ今日天道の冥加を恐るるや道は急きバ刑に逢ふことを恐るる懷小人ハ吾身の仕合の惠あることを懷とわらう慎むべし

事ナラズとや

子曰。まはく利に放
て行ハば怨多し

能礼讓を以て國
と為人乎何有ん
礼讓を以て國と
為りて能んハ
礼を如何

位益と患不以て
立所と患已と知
て莫と患不求
て知可と為

○子曰。放於利行多怨

人の行ひはとく吾身の勝手よ心を放て利分を
貪る時ハ必む怨を受ふ多しとありや

○子曰。能以禮讓為國乎何有不能以

禮讓為國如禮何

の仕合なり若礼讓を以て國を治ハ何の如きもの
らんや然らば國家の法令を犯すも人を犯して如何
くあるや譲ハ物をあきらむるなり礼の本意なり
人々身の分限をさへも眞加をせりて身を引上げま
安穩なるべき
理なり

○子曰。不患無位患所以立不患莫己

知求為可知也

上より下へを所以の徳の己身よなれど患べし
徳を人の知るを莫と患べし自然と人々知可
為との徳を胸中よたくし
為とを求むべしとあり

○子曰。參乎吾道一以貫之曾子曰唯

參ハ曾子の御名なり聖人曾子の御名をよびかけの
吾大道の根本を授けたり平生吾教の所を人ハ廣く
大しして見得と成りしと思ふれども中々たよあざ
をれ吾道とありハ誠之至とあり之を以て万物を
貫きとありし人の君よありてハ仁の道よ止る人の
子と
してハ孝の道よとありしと見ても悟得べし又忠なり
孝はあざざざと皆一理なりと曾子の之を申上
て早速其理を合点なりのみ唯と早速御講を申上
り

子曰。出門人問曰。何謂也。曾子曰。夫

子之道。忠恕而已矣。

自餘の御門人ありて合点

子曰。出門人問曰。何謂也。曾子曰。夫

參乎。吾道一以貫之。曾子曰。唯

致さしすこぐくや有る多し曾子御尋みてりや何の謂ふや曾子即ち一貫の理を説くひて曰く夫子今の所の道ハ即ち忠とて心の誠厚を以て人情を恕とりの事而已矣誠の至ハ是仁心ナリ仁ハ聖人の大道ナリ忠恕とりの仁を工夫の道ナリとぞ中の所ハ学者深く謹んでよく心を籠めてとべ

○子曰君子喻於義小人喻於利

君子と小人との表裏ナリ凡て人の言を聞ても物の理を考へ會得よくも君子ハ何事をも義理の叶ふ道ハ當らず其善方へ喻得たり小人ハ何事をも己が得手勝手ナる事ハ喻得たり小人ハ人の善行を見ても夫レ理を付妬めたり何事も裏へらるを廻さす誠の愧れとぞ

賢と見齊とを思ひ不賢と見て内は自省る

○子曰見賢思齊焉見不賢而内自省也

人の善事ハ凡て己ハ賢も事を見てハ必ど吾も如く齊むんとぞ不賢と見てハ又不賢と見て内は自省める

事を見てハ吾身ハあらん事を省める

父母に事し幾く諫志を從不を見て又敬して違不勞して怨不違

○子曰事父母幾諫見志不從又敬不違勞而不怨

父母の行ひ悪くハ幾くとも諫留む居ハ不孝ナリ父母の心志從がらずを見佛るハ早速とりや却つて怒り逢て苦む怨らず事ハ路をとり

行ひを乱す諫留む居ハ不孝ナリ父母の行ひ悪くハ幾くとも諫留む居ハ不孝ナリ父母の心志從がらずを見佛るハ早速とりや却つて怒り逢て苦む怨らず事ハ路をとり

父母を事す身ハ世に在る父母の心を安堵さす世を去めハ己が心の安堵を去る

○子曰父母在不遠遊遊必有方

父母在ルバ遠遊不遊小必方有

安行むの理ハ父母在ルバ遠方の所へ遊居も必ず方有告知せる

父母を事す身ハ世に在る父母の心を安堵さす世を去めハ己が心の安堵を去る

その所をたがへば、
まづいふべきなり

○子曰。三年無改於父之道。可謂孝矣。

此章まへより。○子曰。父母之年不可不知也。

一則以喜。一則以懼。人よりようて我父母の年の

あり不埒の至なり。子より者ハ父母の年を以て不可不

父母曰。過ぎり。我ハ今を事奉する誠ニ仕合たり

事なり。と喜びも。年老る事なれば死しむひ時節も

年をも不知りのなり。沙汰の限なり。

○子曰。古者言之不出。恥躬之不逮也。

古者の人ハ古女に口を善悪是非の事を言ひ出さず。と

いふに。と。ハ吾躬の行ひ口を。と。速が。恥し。思ひ

し。へ。なり。○子曰。以約失之者鮮矣。

訓て謹みて。の。め。なり。事なり。言。く。も。躬行。し。も

と。ハ。鮮矣。○子曰。君子欲訥於言而敏於行。

訥と。ハ。と。の。ど。り。を。り。の。君子ハ。徳。を。尚。て。實。た。り。を。尚。て

言。行。ひ。の。表。裏。ある。ハ。人の。恥。づ。と。し。た。り。や。

○子曰。徳不孤。必有鄰。

徳ある。者ハ。必。ぎ。人。親。を

○子游曰。事君數。斯辱矣。朋友數。斯疏。

事。君。の。徳。有。り。者ハ。け。つ。り。て。孤。立。す。ハ。か。ら。ず。た。と。ハ。家

三年父之道。可謂孝矣。

父母之年。不可不知也。

一則以喜。一則以懼。

古者言之不出。恥躬之不逮也。

以約失之者鮮矣。

子曰。君子欲訥於言而敏於行。

徳不孤。必有鄰。

子游曰。事君數。斯辱矣。朋友數。斯疏。

徳孤。必有鄰。

子游曰。君に事

君に言訥して

行さひは敏を欲

君に言訥して

行さひは敏を欲

君に言訥して

行さひは敏を欲

君に言訥して

行さひは敏を欲

君に言訥して

行さひは敏を欲

君に言訥して

行さひは敏を欲

君に言訥して

數されハ斯に疏

矣

子游の仰セハ凡そ主君より敷く者ハ君り一國家の大事ふかり乃至御名よかり事あはるる事

謙言をとりこまじく一城もなほしと敷く計のつ時ハ却て耻辱をとるものなりまこと小事なれど朋友の道も義を以て交りをは互ひに信實をばくまじく然るも事あげく言語は出バ却て疏るものなり凡て諫る事ハそのいさ

萌んとする所の場をとりまじく事成てハ益まじくおれりのなり○三たび諫て君用まじく官禄を辞退して

去とあり是ハ治世毎事なる時なりり君の大事小及なるとする時ハ身命を社まじく又侯人ありて

上を暗と死ハ私の意趣を説て生命とら果を何とぞ忠のいさなり天朝の明道かくの如き事古来よりして

志のりといふ中華といふも誠忠の士ハ異なり事とくたり

公治長弟五

子公治長を謂く妻を可なり縲之中に在と雖

公治長第五

子謂公治長可妻也雖在縲紲之中非

其罪也以其子妻之

其罪也以其子妻之

御門人公治長へ御息女を遺されんもの思め

子南容と謂ハく

邦道有にハ廢ら

其為人の取べきを論じ公治長ハ公邊へとら

不邦道在ハ刑戮

免を其兄之子

道なり罪ハあむむこの故に可妻と仰ら

を以て之に妻を

子謂南容邦有道不廢邦無道

事なり

免於刑戮以其兄之子妻之

免於刑戮以其兄之子妻之

御門人南容ハ

子子賤を謂ハく

君子なる哉若

人なり邦と治まじく道あり時代ハ必む上へ引奉用ひ

君子なる哉若

○子謂子賤君子哉若人曾無君子者

刑戮に逢はるなどの機変あり是全く心の決断を言と

○子謂子賤君子哉若人曾無君子者

斯馬取斯

御門人曾子賤ハ本より賢を敬む徳を

斯馬取斯

御門人曾子賤ハ本より賢を敬む徳を

好い誠は君子たる哉とちやのひ又魯の國

子貢問曰曰賜
如何子曰曰賜
女器也曰曰
何の器也曰曰
瑚璉也

○子貢問曰賜也何如子曰女器也曰
何器也曰瑚璉也子貢自己の気量を何かに
位なりやと同奉する御答に
女ハ器也子貢安んずるを以て同奉する
ハ器也の内々ハ何の器とりどるやと重ての御答に
器器もれども並くなくとそ

或ひと曰く雍ハ
仁仁にして佞佞まら不
子曰子曰まハく馬馬んを
佞佞と用人用人人人ハ御御禦禦
に口給口給と以て屢屢
人人ハ憎憎まら其其仁
を知知不不馬馬んを佞佞

○或曰雍也仁而不佞雍ハ仲弓の名なり
顔淵よりあつての御門
人人ハ常常言言行行慎慎重重威威ありて本心本心の
徳徳を存存つ然然るに當時當時ハハいいくく佞佞口口ありて賢賢者者とといいひ
ありてありて知知不不馬馬んを佞佞と問問子子曰曰馬馬用用佞佞御御人人以以
口給口給屢屢憎憎於於人人不知不知其其仁仁馬馬用用佞佞

を用人
子漆雕開と仕へ
使對て曰く吾斯
之を未だ信信むる
と能能ハ未未子説子説ぶ

○子使漆雕開仕對曰吾斯之未能信
子説御門人漆雕開ハ信も厚く身身の行行を務務人人なり
聖人の御答ハ徳ある者ハ馬馬口言口言ハ多多を用人用人や或ハ應應
答答小小口給口給をたの用用て不足不足なる處處を御御禦禦屢屢人人ハ憎憎む
大道大道ハ仲弓仲弓ありや馬馬口言口言ハ多多を用人用人の理理也

子路之を聞て
喜ぶ子曰子曰まハく
由由ハ勇勇と好好むと
我我ハ過過る取取材材
所所在在于于

○子曰道不行乘桴浮于海從我者其
由與子路聞之喜子曰由也好勇過我
無所取材此時世衰正と道道の向向の寡寡く聖人
之を嘆嘆む道道も行行はと見見るいざや

子路之を聞て
喜ぶ子曰子曰まハく
由由ハ勇勇と好好むと
我我ハ過過る取取材材
所所在在于于

○子曰道不行乘桴浮于海從我者其
由與子路聞之喜子曰由也好勇過我
無所取材此時世衰正と道道の向向の寡寡く聖人
之を嘆嘆む道道も行行はと見見るいざや

子路之を聞て
喜ぶ子曰子曰まハく
由由ハ勇勇と好好むと
我我ハ過過る取取材材
所所在在于于

○子曰道不行乘桴浮于海從我者其
由與子路聞之喜子曰由也好勇過我
無所取材此時世衰正と道道の向向の寡寡く聖人
之を嘆嘆む道道も行行はと見見るいざや

孟子武伯問子路
仁乎子曰
不知

又問子曰
由千乘之國
其賦之治使
可乎其仁也
不知

求何如子曰
百乘之家之宰
使可乎其仁
不知

赤何如子曰
赤也何如子曰
赤也何如子曰
赤也何如子曰

子曰貢曰
孰愈對曰
賜也何敢
同也

樽一乘之海士を去て外國へ行かぬのとき
さて右やうに諸國遊行せばその時こそ我より從ふこと
の勇猛正實の人なきは子路を承へて喜ぶの色
あつて是を以て聖人より禁めぬ由が勇
我々の過さずかゝる一事をさすや否進む者ハ
我々の取材とてなす者なりと由ハ子路の名也

○孟子武伯問子路仁乎子曰不知也

仁ハ心の徳愛の理天下及之を大道といふたゞ賢なりと
いふ中子路の場所あり或は子路ハ仁者なりや
不知と答ふたが又問子曰由也千乘之

國可使治其賦也不知其仁也
推之如何

國の人民を治む心安んば由が氣量ハ千乘之
賦ハ人數に付る事なり

也千室之邑百乘之家可使爲之宰也

不知其仁也
又御門人殿求ハ何如人ハ御答

赤也何如子曰赤也東帶立於朝可使
出をさすの國たゞその家の政通を以て位の宰と

與賓客言也不知其仁也
又公西赤ハ人柄ハ

○子謂子貢曰女與回也孰愈對曰賜
東帶冠にして御殿朝立出て諸方の賓客

也何敢望回也聞一以知十賜也聞

聞て以て十と知
賜ハ之を聞して以
二を知

子曰まはく如弗
かろ吾女の如弗
を與

宰予晝寢
子曰まはく朽
木ハ離可う不糞
土之牆ハ朽可
不予於て與何
誅

子曰まはく始り吾
人於其言を
聽て而して其行
を觀ん予に於
與是を改む

吾未だ剛者を見
未或ひと對して曰
申根子曰まはく

一以知二御門人の中子貢の常
とを方々としてを好く
聖人の智と自己

顔淵の名なりかく古の学者ハ自己氣量をはり
及ぶるを及ばざると知る後世に己を誇る者と同
顔淵の及ばざると知る後世に己を誇る者と同

子曰弗如也吾與女弗如也
子貢ハ自ら
の量とあり又

宰予晝寢子曰朽木不可雕也糞土
許さばんハ

之牆不可朽也於予與何誅
宰予ハ御門人
宰我なり

聖人の御臨光を
宰我の行を厲む
却て自の行を厲む
却て自の行を厲む

子曰始吾於人也聽其言而信其行
吾於人也聽其言而觀其行於予與改

是
吾始より
正直道としての事を

子曰吾未見剛者或對曰申根子曰
其言をも聽て其行をも觀て
承知さば宰予が事於て始て是を改む

張ハ慾ナリ馬
ゾ剛ト得人
未ニ多ヨヒル

子貢曰ク我人之
諸我ヨカス
欲セ不吾も亦諸
人ヨカス
ラント欲も子曰
所ハ非也

子貢曰ク夫子之
文章ハ得テ聞可
夫子之性と天道
與を言まハ得
テ聞可

張也慾馬得剛
剛ハてづうとよて操行正しく
志ざしとぞのめとくたは身

不義をなす君の爲ハ惠とせんハ飢て死とも
夫ハ聖人も右剛者の人柄ハ

未見ズ好ヤクハある人として御門人
申張一も剛者とりあのち聖人御答申張ハ慾

好ハのち馬ハ剛とらしを得人や慾とハ
好ハとくたは人ハ善らんと夫よて善行を

守事あハハ
守事あハハ

○子貢曰我不欲人之加諸我也吾亦
欲無加諸人子曰賜也非爾所及也

此段子貢仁の工夫ありて凡そ人より我身ハ加ハ
事ハ不欲とらハ吾より人ハ加ハる事ハ
吾人と存ズるより中庸の書ハ我身ハ

逢事ハ是ハハヤるとハ必ズ人ハ
事ハ及メようハ是ハ怒とし我身を
以て人ハ推及りて愛ハ我身ハ事
を廣ク推及りて愛ハ仁の道とらハ
所ハ及メ

○子貢曰夫子之文章可得而聞也夫
子之言性與天道不可得而聞也

子貢の平生見受奉るを述ハ夫子の身に
の処々御徳の文章ハ人々見聞奉る

性ハ人の生ハ始メ受メ天の理の定メ
性ハ人の生ハ始メ受メ天の理の定メ

天道ハ自然と天の運數ありて人の自由
事あり人の事ハ知者も知らず口ハ

常の人ハ惑を厭テ
惑を生ズ

○子路有聞未之能行唯恐有聞

御門人子路ハ義理を尊び行ひ進むる故御おし人をうけぬりて未だその事をよくせざる内よ又其上は御おしへと耳の聞と有らと恐むるなり

○子貢問曰孔文子何以謂之文也子

曰敏而好學不恥下問是以謂之文也

子貢問て曰く孔文子何を以て之と謂子曰まかく敏にして學を好む下問を耻不是を以て之と文と謂

此段衛の國より孔圍といふあり然る人より尊て孔文子といふ文といふ字古より徳ある人よ名付らるる聖帝とあがめ醜と多し然るに何の以あり之を文とハ謂つてハ行ひ醜と多し然るに何の以あり之を文とハ謂つて名との問なり御答文子が為人常は空く日を送む右人の事を敏く學びその上下問を耻し思ハ不と年の下なる者は愧むて之を愧むとハ問たつめなり

子子産を謂ハク君子之道四有其

已と行かり恭其上也事敬其民と養惠其民を使義

晏平仲善人與交久くして之を敬

是認を以てして之を文とハ答なり

○子謂子産有君子之道四焉其行已

也恭其事上也敬其養民也惠其使民

也義子産ハ鄭の國の大夫なり其の人君子の道四品有ら小己躬の行つては恭ふりくニツハ君小

對してハ敬のやろろ自容顔ありハ是と云ふハ下民を惠と常は心にけり四ハ下民を使

也と云ふも義をに

○子曰晏平仲善與人交久而敬之

晏平仲ハ序不出る聖人をさへも晏女嬰の事なり此人善人の交をとなせり人なりと聖人なりぬる人常は人と交接し馴く布きしむとつては次第にたぐ久しきと交は敬して礼義ありしとや今の風俗と

違他邦に至て則
はら曰く吾大夫崔
子猶一と之を
違一邦よ之て則
はら又曰く吾大夫
崔子が猶と之を
違何如子曰ま
清一曰仁乎
曰ハく未知未馬
を仁を得ん

季文子三思而後行
子之を聞て曰ハく
再斯可矣

甯武子邦有道有
則ハ知る邦道
無バ則ハ愚る
其知ハ及可
其愚ハ及可
不也

之至於他邦則曰猶吾大夫崔子也違
之之一邦則又曰猶吾大夫崔子也違
之何如子曰清矣曰仁矣乎曰未知焉
得仁崔子ハ齊の大夫なり 齊の君元より不徳なるに 崔子が爲るは 齊の君崔子夫人 不義をなすつめは 崔子が爲るは 弑さるゝ 陳文子 不義をなすつめは 文子此有るを見 餘は見若く 汚らハく思つて馬十乗やど持する家なるを 官録 をさう上て齊の國を立する 他國へ至るに兼て名の あり文子ゆへ重く抱らるゝが不仕合なる人 吾國の崔子が猶はありるを小達してさく官録を捨 てちる 一邦に至るは 同くやうある以上 三度ある 舉動となす 此の爲人ハ如何となす 御答は 欲はるゝを賣ともせずと 欲はるゝハ清矣人なりと ぞちこ可て曰く仁なりや 答て曰ハく臣として仇をと

報せざる段ハ未知焉仁の名を得んや
吾より目
を害するハ弑といひ吾より下なる者を殺さハい

○季文子三思而後行子聞之曰再斯
可矣季文子ハ魯の大夫なり 生付て何事ハ 疑はるゝと幾度も思ひて人柄は 物より人を入るゝハ 二度思ひて念入てより 疑てありとさなり 季文子の行ひを聞め 疑てありとさなり 季文子の行ひを聞め

○子曰甯武子邦有道則知邦無道則
愚其知可及也其愚不可及也

甯武子の稱めしてよく世の臣を悟て身を
若勞の場は置ざらん人なりとを 邦明らふ道有バ
知者賢人ハ用ひらるゝり 邦は道毎時ハ知ある者ハ愚
しるゝてふて却愚なる者ハ身は害なり 然る甯武子

ハ智を自由用ひて人なり。邦は道ある時ハ智者
なり。用ひらるる邦は道なき時ハ愚者なり。人に見られ
場所ハ及ばぬとたり。と答ふのひ

○子曰陳曰歸與歸與吾黨之小子狂簡而
斐然成章。不知所以裁之。

子陳は在て曰く
歸與歸與吾黨
之小子狂簡而
斐然とて章と
成之と裁まら
所以と知不

此義ハ聖人諸國へ御周流ありて此時陳の國に在
り故郷に歸んとせしめしめての語なり。ふるまひ歸與を
歸與とてのひ子細ハ吾小子の黨のひて学問は進
志ざり大なり。若ハ定めて狂簡て社あり人多くハ
斐然に文章風流のを成て礼樂學術の
裁まらるる所以と知まらるる人と仰せらるる

伯夷叔齊ハ舊
惡と念ハ不怨是
を用て希まら

○子曰伯夷叔齊不念舊惡怨是用希
伯夷と叔齊ハ兄弟也。徳高く孤竹城の君の子
なり。その人柄として舊はあり。人の悪事ハ念は

執微生高と直
なりと謂或は醜
と乞諸と其鄰に
乞て而して之を
與諸而馬

○子曰執微生高直或乞醜馬乞諸
其鄰而與之。
名を挙ぐる者。一は道をうけたるハ外大道の害とかり
ゆへ已とと得むして詳らふ舟とたり。先達て或人
醜を乞は来り折る内は毎々をハ竊は其鄰へ行
乞来り。あを乞て吾内よりあり。やうふその礼を受
けしむる。正直とつあり。のハ理ハ理非ハ非といひ有ハ有
毎ハ毎といひあり。正直なり。聖人其介の場所は氣を
付て其善惡を見らるる人。謹と
り。事をも重とせ。その所以と示る。

巧言令色足恭
左丘明之を
耻丘も亦之を耻
怨と匿而して其

○子曰巧言令色足恭左丘明耻之丘
亦耻之。匿怨而友其人左丘明耻之丘
亦耻之。

人ハ死に
是用は

○子曰巧言令色足恭左丘明耻之丘
亦耻之。匿怨而友其人左丘明耻之丘
亦耻之。

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

玉藻集館蔵

人を友と以左丘明之を耻丘亦之を耻

顔淵季路侍子曰盍各言爾志

子曰盍各言爾志

子曰曰願車馬衣輕裘朋友與共之之也

亦耻之甚

言を巧みして諂ひ顔色を令て敬恭の足らぬ内にも悪く嫌て上向げりて交接陰謀くわき是といふ事も左丘明を耻とせし由我もや

顔淵季路侍子曰盍各言爾志

顔淵と季路と御傍に在りて小聖人仰あて

子曰願車馬衣輕裘與朋友共之

子曰願車馬衣輕裘與朋友共之

而無憾

顔淵曰願無

伐善無施勞

顔淵自己の願うは吾たといふや

子曰老者安之朋友信之少者懷之

聖人の意思は吾常々天下の老て衰ゆる者を必く

子曰老者安之朋友信之少者懷之

の死民を撫安しとてこころを抱くは故に平生年

已か入乎吾未
能其過まら見
て内自訟
者と見未

十室之邑必忠
信丘如者有
丘之学を好むに
如不

論語卷之終

論語

四十一

王漢真書

必者者愛吾へもちこく懐と相親
程子先生の仰る聖人の心ハ天地の万物を生
育の気象なりと
○子曰已矣乎吾未見

能見其過而内自訟者也
此段の意ハや々の
人為と遂ハ

見ざる已矣乎やと恐る子細ハ若身小過
事あるに吾と吾心の内ハ其宜ハく不るを
見解心を切田

て能く心訟磨
○子曰十室之邑必有

忠信如丘者焉不如丘之好學也

魂ハハ学問を好む事ハ道を学べバ大徳も
至るハ我を生ハるハ知るハ中ハくある

たとハ十室を有ルある小邑ハ忠信ならず我ハ
人も有ベク我如ク学んで倦むの学問を務るハ如人

あるハ聖人も必ズ学を好
ハ事示ハるハ聖人の御名也



